

28 溪流名としての「沢」と「谷」の言語境界に関する考察

飯豊山系砂防工事事務所 石 月 升

はじめに

砂防事業とかかわりの深い溪流は、東日本で「××沢」西日本で「××谷」と呼ばれており、その言語境界線は、フォッサマグナの西側に連なる北アルプスの稜線と、ほぼ一致するとされているが、太平洋側の岐阜、愛知県内における境界は確認されていない。

主として、直轄砂防工事事務所が作成した管内図をもとに、言語境界線付近の微細的な調査を行って、境界線を推定した結果と、溪流の呼称の適用法などについて報告する。

1. 言語としての「沢」と「谷」の周辺

1. 1. なまり

「沢」・・・サ（秋田、岩手）サー（岩手、福島、茨城）サアーツコ（茨城）サーコ（福島）サーヤ（静岡）サツコ（岩手）ザワ（飛騨）ソー（越後）

「谷」・・・ターニ（熊本）タイ（鹿児島）タヌ（岩手）タネ（富山、広島、熊本）タン（富山、鳥取、熊本）ダン（鳥取）

「沢」の飛騨、「谷」の岩手を除くと、「沢」のなまりは東日本に、「谷」のそれは西日本に集中している。

1. 2. 万葉集（頭注、題詞、左注をふくむ）

「沢」（左和、佐和など）・・・11首。「谷」（多尔、湊など）・・・25首。「川」（可波、加波など）・・・452首が数えられる。都の歌人たちの作品のなかに「沢」が詠まれている一方で、東日本の歌とされる東歌のなかにも「谷」をテーマとしたものがある。

このなかから、「谷蠅」「沢蘭」などの動、植物を詠んだものなどを除いて、溪流名として用いられているものだけを拾ってみると、「沢」が10首、「谷」が11首とほぼ同数になる。東歌、防人歌以外はすべて西日本の歌だとすると、西日本における「沢」の混入率は8/18、44.4%となる。

1. 3. 熟語（日本国語大辞典・小学館による）

語頭に「川」「沢」「谷」の文字が付されている熟語は、「川」104語、「沢」54語、「谷」55語である。このうち川風、沢風・谷風のように「川」「沢」「谷」の3字に共通する熟語は5語、川底・谷底のように「川」「谷」の2字に共通するものは10語あるが、「川」と「沢」、「谷」と「沢」のみに共通するものはない。

このように、熟語の分野では「沢」よりも「谷」が優位な言語となっている。

1. 4. 動・植物名

動物名で「川」が付されたものは49語、「沢」が2語、「谷」が1語であり、植物名で「川」が付されたものは49語、「沢」が33語、「谷」が16語ある。

動・植物名ともに「川」が「沢」「谷」を圧倒しているが、ここでは「谷」よりも「沢」が優位で

ある。

1. 5, 地名(世界大百科辞典—平凡社による)

富山、岐阜、愛知以西を西日本とした場合、「沢」または「谷」の文字が付された地名の総数は、東日本で1565(うち「沢」1139、「谷」426)西日本で677(うち「沢」91、「谷」586)である。

(図-1参照)

東西における「沢」と「谷」の混入率をみると、東日本での「谷」が27.2%なのに対して、西日本での「沢」は13.4%である。

地名の語尾に「谷」の文字が付されているものは、東日本に426、西日本に586あるが、東の77.2%が「ヤ」と読み、西の89.1%は「タニ」と読む。

1. 6, 土石流発生溪流(S53, 砂防便覧による)

表-1のように、土石流が発生するような小溪流でも「川」と呼ばれているものが多い。しかし、ここでも東の「沢」と西の「谷」は歴然としている。(洞・俣などが含まれているので数値は合わない)

表-1 土石流発生溪流名(S47~S52)

	発生溪流数	沢	谷	川
東日本	98	43	3	52
西日本	464	0	86	355

2, 「沢」と「谷」の言語境界線

2. 1, 北アルプス付近

図-2は各管内図から「沢」と「谷」の分布をプロットしたものである。

日本海側の新潟、富山県境から、白馬岳、槍ヶ岳、御嶽山を経て、岐阜・長野県境線が木曽川と交差する付近までは、北アルプスの稜線を挟んで、東側の「沢」と西側の「谷」は鮮やかな対照を示している。しかし、恵那山付近から南の岐阜、愛知県内における言語境界線は不明確である。

一般の言語境界線と違って、溪流名は河道に付されたものである以上、境界線は河道から離れては存在し得ないであろうという前提にたつて、この付近の境界線について検討してみた。

2. 2, 中津川(木曽川左支)

この川の溪流名分布は「××沢」が12、「××谷」が15、「××洞」が7で、「沢」と「谷」は数のうえで拮抗している。また、下流部では「沢」と「洞」が交互に出現したり、同じ地点で合流するほぼ同規模の支流の、右溪が「沢」で左溪が「谷」となっているなど、渾然としていて命名の法則性といったものは認め難い。言語境界付近の河川では、極めて特異な存在である。

この河川を境とする、上下流の溪流名から判断して、この地点が「沢」と「谷」の言語が激しく衝突している地点(あるいは、西側からの「谷」の侵入に対して、防波堤の役割を果たしている河川)つまり、境界線と判断できそうである。

2. 3, 矢作川の周辺

伊勢、三河の両湾に注ぐ豊川、矢作川、庄内川(土岐川)揖斐川の4河川の支川名をしらべたのが表-2である。このように、東側の豊川には「谷」の付された溪流名がなく、西側の揖斐川には「沢」がない。揖斐川については、圧倒的に「谷」が多いので異論をはさむ余地はないが、豊川は「沢」

の絶対数が少ないので即断はできない。しかし、境界付近の西日本側に特徴的に出現している「沢」の付された溪流名がまったくないことから、この川については「沢」圏に属するものと考えてよさそうである。

境界線は残る2河川、矢作川か庄内川のいずれかに存在する可能性が高い。

庄内川の場合、溪流名としての「沢」が存在しない上に、地名をふくめた「谷・洞」が「沢」の約2倍に達しているので「谷」圏の河川とみることができる。

一方、矢作川では「沢」対「谷・洞」が31対33とほぼ同数となつている。また、溪流名としての「洞」が15あるのに対して、地名としての「沢」が13に達しているなど、衝突地点の特徴を備えている。この河川が言語境界線であると判断できそうである。

3. 「沢」と「谷」の地形的特徴

同じような小河川であつても、平坦な地形を流下するものを「沢」や「谷」と呼ぶ例は希で、扇頂部から上流の山岳部に「沢」や「谷」が多い。「沢」「谷」の出現度数と地形の起伏度との間には、有意の相関が認められ、10×10kmメッシュの起伏量が400 m以下の地形では、「沢」「谷」の出現度数が極めて少ない。

また、山岳部を流下する河川でも、流量の豊富なものは「沢」や「谷」とは呼ばず、「川」と称されているものが多い。「沢」「谷」の大きさの限度は、流域面積80km²（信濃川、島島谷等）程度であると思われる。

言語境界線付近に限ってみると、溪流名としての「川」「沢」「谷」「洞」の間に、規模の大小や、流下地形（微地形）の形状による命名の法則性や、それぞれの呼称間の序列の原則などを認めることはできない。新潟県の関川水系などにみられる「××沢川」の例や、徳島県、吉野川水系などにみられる「××谷川」のように、最上流部の小溪流まで「川」と称されている地域がある。これらの場合、「沢」や「谷」は、「川」を形容する言語として用いられている。これらの現象とあわせて考えると、これは、言語伝播の速度差などに関連する、ある種の漸移現象、つまり言語としては「川」が最も古く、ついで「沢」、さらに「谷」の順で出現したことを物語るものだと思われる。

4. おわりに

溪流名は、その地域の人々の生活のかかわりあいのなかから誕生した、言語の一種である。「沢」と「谷」の東西対立の原因も、数多くの言語対立現象や、言語伝播の歴史に照らして解明されなければならない。それは、日本の古代史の謎につながる興味のないテーマでもある。

本報をまとめるのに際して、新潟大学教育学部、大橋勝男教授の御指導を戴いた。記して謝意を表す。また、岐阜県砂防課をはじめ多くの関係機関から資料を提供して戴いた。厚く御礼を申上げる。

<参考文献等>

日本語の世界・8「言葉・西と東」徳川宗賢（中央公論社）、日本地名学・上・下 鏡味完二（東洋書林）。日本古典文学体系「万葉集」（岩波書店）。日本国語大辞典（小学館）。世界大百科辞典

「地図編」（平凡社）。県内地名新考・小林存（新潟日報社）。砂防便覧53・（建設省河川局）。管内砂防便覧49・（北陸地建）。直轄砂防工事事務所管内図。同河川工事事務所管内図。新潟・岐阜両県土木事務所管内図。

図-1 地名における「沢」と「谷」の分布

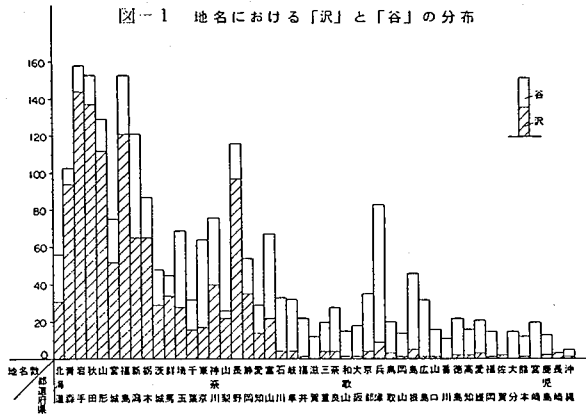


表-2

言語境界線附近の溪流名

河川名	川	沢	谷	淵	叉
登川	85	5	0	0	0
矢作川	186	4	2	15	0
庄内川	109	0	10	2	0
落斐川	80	0	501	2	7

矢作川と庄内川の比較

	矢作川	庄内川
☆沢	17	5
谷	7	11
淵	17	11
☆沢川	14	17
谷川	6	7
淵川	3	16

図-2 言語境界線付近の「沢」と「谷」の分布状況

